レ〳〵先方は何と申しても仔細ないが、其方が私の前で、馬鹿坊主〳〵は甚だ聞憎い、嗜まつしやるが宜い　門『甚だ恐れ入りました、どういたしませう　胤『イヤ苦しうない、先達ては此方氣分が惡かつた爲めに不覺を取つた、今日は幸ひ氣分も爽か、今日こそは不覺を取らん、先敗の恥辱を見ン事雪いで見せる、道場へ案内いたせ　門『畏まりました……エ、どうぞ、ぞ通り下さいまし』忽ち彼の男は道場へ通つてヌツト突立つて居る、徐かに胤榮立出でまして　胤『望みに在せ對手いたす、今日は初度とは違ふ、其の心して掛らつしやるやう　○『默れ强慢無禮の馬鹿坊主、天下の廣きを知らず、天上天下唯我獨尊とは何んの事だ、一槍の下に突伏せ、看板を持つて參る

から左樣心得ろ』と大聲を發して怒鳴りました　胤『何を小癪な』と覺禪坊手槍を取つて向ひセメ「氣合を懸けて位ゐ取り　互ひにからむ槍と槍秘術を盡した手練の早業　四度合すを一合のはかりも知れぬ彼れが腕前　一聲叫けんで胤榮が　槍をガラリと卷落し　胸元したゝか突止めたり」

胤榮はドタリ倒れる途端に彼の男表へ飛出して終つた　○『サア大變又先生目を廻した、今度は芝では往かない、跡で先生愚圖〳〵いふから、早く水を持つて來て顏へ吹掛けろ　〈『委細心得た』と茶碗へ

水を汲んで持つて參り、抱起して顏へブーブッと水を吹掛け、ヤッと脊中を二ッ三ッ動突くとウーンと息を吹返した覺禪坊、パッチリ眼を開いた　胤『參つた　△『先生今頃仰ッしやつてもモウ間に合ひません、對手は疾くに何所かへ行つて終ひました　胤『モウ居らんか

×『貴所が倒れる途端に表へ飛出し、夫も宜いが又た看板を持つて行つて終ひました　胤『又た持つて行つた、惡い戯らをする奴だ、アー、殘念千萬……　×『今日は先生御氣分はお惡くございませんでしたか　胤『今日は氣分に別に障りはなかつた、ダガ少し脚氣の氣味で膝がガク〳〵して　×『成程御尤千萬、處が那の看板が掛つて居た下に斯樣なものが落ちて居ッました、外して持つて行く時に落ことし

て參つたのでございませう　胤『何んだ』と取上げて見ると一枚の紙に墨黑々と書いてあるは

フシ「我身より　我身にまさる我身あり　そのまた我れに　負ける我あり」

胤『何んだ是は　△『我々にはとんと分りませんが、先生御判斷を

胤『ウーム「我身より我身にまさる我身あり其又我に負ける我あり」ハテナ……』一室の中に這入つて覺禪坊、腕拱いて考へ　胤『成程禪家の悟りだな、ウーッ彼奴凡人でない、今まで諸國の武士と立合つたが、此んな不覺を取つた事はない、ハテ乃公は天下の名人胤榮に敵ふ者はないと慢心をした爲に少し腕が下つたな、乃公が餘り强

慢増長した所から魔が差したのではないか、是れは今一層修業をしなければならん、怠ると跡戻りがして行かんものだ』と急に心附いて、サア夫れから素槍を取つて一生懸命に修業いたし、二六時中更に油斷なく槍を放しません、斯う突込むと先方が斯うする、こう繰込む、向ふから突掛けて來る、此ういふ工合にと工風に工風をこらし、一日一間に入つて考へて居る、餘まり肩が張つて氣がつまつて來た、どうも家の中では氣がちつて思ふやうにならない、之はいつそ人の氣のない所へいつて工風したら又面白い考へが出るだらうとブラリと日の暮方に道場を立出でゝ、やつてまゐりましたのは程遠からぬ猿澤の池、かの采女が身を投げたといふ有名の衣懸柳の邊り

まで參りますると、早や日も全く暮れ果て、幸ひ人通りもない所であるから至つて物靜かであります、池のふちに立つて胤榮が、槍を取直して縱横無盡に打振つて居る中に、氣分も爽々として肩の凝りも引きました、ア、宜い心持ちだと流るゝ汗を拭きながら

フシ「槍の石突を岸に突立て　池に向つてホッと一息
休息なせし其時に　風に亂るゝ柳の葉越し　水に宿
れる三日月の　影は佇む胤榮が　槍の穗先にさしそ
ひて鎌形にこそ映りたれ　映る月影小波に　搖られ
て消えつ顯れつ　自からなる幽顯の　二法をこゝに

悟れとや　いまぞ迷ひは猿澤の　其池よりもいと深き　覺禪坊が心の喜び」

思はずハタと膝を打つて　嵐『ウム茲だ、是はい丶事に氣がついた、素槍に此の鎌を付ければ必ず便利に違ひない、敵の槍をこう搦んで刎上げる、こうすればこうと猶暫くの間考へて居りましたが、僅かの中に槍術の玄妙を悟りましたものと見え、覺禪坊嵐榮手を拍つて喜びました、總て何に限らず物の玄妙にいたるといふのはむづかしい、しかしながら玄妙とか神に入るとかいふのはほんの僅かの呼吸の中にある、これを悟れないからいつまでも苦しんで居るのでございます、尤ともこの悟りを開くといふことは中々尋常の者では出來

るものではございません、昔しから神明の擁護を仰ぐとか又は佛陀の冥助を願ふとかして其悟りを開いた人もございます、只今でも學者が、いくら考へても解らない事があつて夫かため數年の間苦しんで居た處が、或夜フト夢の中にそれを悟つたなど丶いふ事もある、又は現の中に神に敎へて貰つて目がさめて見ると夫が少しも違はなかつたなど丶申すこともございます、何にしても其藝が神に通ずる程にいたるといふのは不思議なものでございます、殊にこの武藝の中でも弓馬槍劍といつて弓などは別して容易ならんもので往古楚國の秦王の時に養由といふ人がございました、幼年より佛を尊み大聖文珠菩薩に願をこめ、何卒一藝に秀でん事を祈りました處文珠菩薩

其志を憐み、或時養由にお遇になつて、汝は我化身なり我汝に一徳を敎へんとて、自ら双眼の精をとつて二の鏑矢を造り、五臺山の麓に住む兩頭の蛇に衣の糸をよりかけて弦として一張の弓を造り、多羅葉といふ木の葉を集めて直垂を拵らへ、柳の葉を的にして射る術を敎へ給ふ養由夫より玄妙を悟り天下無双の弓の上手となりましたが、後には養由弓をとれば雁列を亂し、猿木を下りて助を乞ふといふほどの勢ひでございました、然るに養由追々老年に及び、重き病にかゝり最早命旦夕に迫るほどに相成りましたから、何卒して生前、文珠菩薩より授りし弓箭の法を傳へ置きたいと思ひましたが、いかにせん天下に其人物なく、この養由にも弟子が澤山あつたが、

いづれも我弓矢を傳へるほどの器量あるものがないから據なく娘の桝花女といふものに是を傳へ置て其身は空しく相果てました、フシ「桝花女も又年經て　命つきなんとする時に　弓矢の弟子を尋ぬれども　我楚國には一人もなし　ほのかに聞けば日本にて　清和の帝の御流れ　源頼光朝臣こそ　武藝の道に勝れたる　天晴無双の名將なり　この人にこそ傳ふべしと　其身は雲にかくれつゝ行方もしらず失にけり」

源の頼光朝臣京の舘にて或時机に寄り、睡り給へる時、天より花

の如き美女、幻の如く下り來て賴光公に告げて曰く　桝『妾父養由より傳ふる所の弓箭を帶せり君に授けんとて巨細の物語りをいたし、弓矢を與へて天に歸る、夢さめて賴光公傍を見れば件の弓矢直垂がありました、奇異の思ひをなして其後敎に隨つて弓の德を施すに更に養由が藝に劣らず、代々相傳して件の弓箭は源家の重寶になつたといふ、されば往古より斯る不思議は度々ございます、餘事を申上げて恐れ入りますが、覺禪坊胤榮は計らずも佛の助けか槍術の極意を悟りましたから、思はず手を拍つて喜び、頓て我家へ戻つて其夜は枕に就き、翌朝ゝなつて、昨夜の中に悉く工風を凝らしたる所の鎌槍といふものを拵らへ、道場に立出で、自身之を打振つて見ると

至極いゝやうに思はれます　胤『ウム是なれば大丈夫……コレ〳〵

×『ヘエ　胤『看板が失なつては誠に躰裁が惡い、板を早々拵らへろ

×『先生モウ看板はお止しなすつたらようございませう、看板を出すと何處から出るか忽ち飛込んで來て、先生を突仆して看板を持つていつてしまひます、ナニあんなものは出さないでも先生のお名前は世間に響いて居りますから決して差支へはございません　胤『イヤ然うでない、一旦出したものを外され放しには出來ない　×『左樣なれば拵へさせませう』と、又看板を拵らへ、今度は『鎌寶藏院流槍術指南覺禪坊胤榮』と書いて表へ出した、間もなく　○『賴む　×『ドーレ』と出て見ると例の侍　×『ホーラ云はない事ぢやアない、看板を

出すと屹度來るんだ、呼出しをかけるようなものだ』といひながら出て行きますと ○『坊主にそういへ、一度ならず二度三度、以ての外强慢極まる看板を掛け、天下に人がないと心得て居る、沙汰の限りの馬鹿坊主、今日は一つ手强どく懲らしてやるから左樣心得て、對手をいたせと取次げ……』 ×『ヘエ〳〵……先生々々〳〵、來ましたよ、アノ色の眞黑な、目の眞鍮色に光つてる、髮の毛の赤く縮れた、怖い阿父さんが參りました、一度ならず二度ならず、又もこんな看板を出して沙汰の限りの馬鹿坊主、今日は手酷く懲してやるから、そのつもりで用心して相手をしろと取次げッといつて、どうも大變に威張つて居ります、どうも今度は先生のお命が危ないと存じ

ますから、何處かへソッとお隱れなすつた方が宜うございませう

胤『馬鹿をいへ、今度は大丈夫だ、道場へ通せ、アノ馬鹿侍ひ、目に物見せて呉れる……』馬鹿坊主と馬鹿侍ひの爭ひ是は何方へ軍配が上るか、今までの樣子では迚も師匠は敵ひそうもないがと門弟は危ぶみながら案内いたす、胤榮道場へ立出で 胤『先達ては意外の不覺を取つたが、能く今日は參られた、此方も前回とは違つて斯かる得物をもつてお對手をいたす、左樣心得さつしやい』と例の新工風の鎌槍を夫へ持出した ○『ウム成程、然らば此方の槍を見せて遣はす』と、擔いで來た槍を出したのを見ると、コハイカニ矢張り同じ月形鎌十文字の槍、胤榮ビックリして 胤『ヤア何時の間にか乃公と

同じやうな槍を造らへて來たか、是は驚いた、併し何程の事やあるべき』と充分仕度に及んで、互に位取りをなし、

フシ『ヤッと喚いて突懸り　互に合す槍と槍　いづれ劣らぬ手練の腕前』

覺禪坊胤榮例も先方に槍を捲上られるから、今日は注意して其手を食はない、其方で搦んで投やうとするを、引外して先方の槍を拂はうといたし、打てば開き、開けば付入り、一上一下上段下段、秘術を盡して戰つたり、

セメ『槍の穗先きは春雨を　縫ふて飛ゆく燕の影か
互に搦む其音は　秋霜叩く雁の聲　陽炎稻妻水の月

水に浮べる三日月の　影に象どる十文字　互に挑む有樣は　見る目眩ゆき有樣なり』

門人孰れも手に汗握つて扣へて居ります中に彼の侍　○『待てッ　胤』

何んだ　○『イヤ汝の腕前餘程上達した、先頃對手をした時は、まだ〳〵其方の槍術未熟であつたが、今日は其方工風に工風を凝らし苦心をいたしたと見えて、まづ是なれば一人前の武術者といつて宜い併し天上天下唯我獨尊など、いふ看板を出すは大いなる心得違ひ、其方は天下の廣き事を知らん井の中の蛙大海を知らず、必ず高慢增長してはならん、如何にも今日の腕前は感服の至り、此後も一層藝術を勵め』と言捨てた儘忽ち表へ飛出して終つた、胤榮大に驚いて

胤『門人衆、今出て行つた先生、何方へ行かれたか跡を見屆け來て呉れる樣　×『心得ました』と表へ飛出して見たが間もなく引返して

×『先生何處へ行つたかトント姿が見えませんが看板が二枚表にございます、先達て持つて參つたのが　胤『ナニ二枚もつて來たウーム……　×『一度に看板が三枚になりました、多い方が宜いから一緒に掛けて置ませうか　胤『馬鹿な事をいへ、然んな看板を出して置てはいかん、天上天下唯我獨尊など丶書いたのは大きに私が惡かつた誠に赤面の至り、彼人は全く天狗の化身、私の高慢の鼻を折りに來たものと見える、ア、恐入つた、天下は廣い決して增長は出來ぬ』と玆で覺禪坊大いに發明して夫から猶も工風を凝して造り出したの

が寶藏院流の鎌槍、是が天下に名高く相成まして、諸國の侍擧つて胤榮の門に入つて稽古いたす、最も戰場で用ゆるには適當であるといふので胤榮の名は天下に知らざる者はない位になりました、此人至つて長壽で、慶長十二年正月二日八十七才で逝去いたしました、

フシ『鎌寶藏院流　月形十文字槍　覺禪坊胤榮の　傳記は之にて止め置まする』

寶藏院覺禪坊　終

岩見重太郎

浪花節倶樂部口演

フシ「月に叢雲花には嵐　兎角浮世は思ひの儘にならぬもの　父は敢果なき玉の露　消し怨みを晴さんと西は九州薩摩潟　東は銚子の端までも　北は蝦夷松前に至るまで　詮議を爲して父の仇をば晴さんと艱難辛苦を致したる　岩見重太郎の一節は」

筑前の國相良の名島の城主三十餘萬石、小早川左衞門尉隆景の臣

にて、千五百石の高祿を頂戴して居りました、岩見重左衛門と云ふ戸田流の劒法の達人でございました、此の人に二男一女があり、總領を重藏、二男を重太郎、長女をお辻と云ひ、然るに惣領の重藏は性質は柔和でございまして、文道は明るうございましたが、武道は左までに達しては居りません、二男の重太郎は力は衆人に優れ、劒法は父の重左衛門を凌ぐ位でございます、十五才まで父の手元で修行をして居りましたが、夫れより伯父の薄田七郎右衛門に從つて學び、二ヶ年の間一心不亂になりまして、重太郎の腕前は同家中で誰一人として恐れぬものはございません、時しも正月の七草の當日、家中の重立たる人々は名島の城内へ參りまして、當日は大廣間で太

守左衛門尉隆景公御立出になり、一同へお盃をお遣はしになりました、此時隆景公は坐中の樣子を御覽になりますと遙か末席に頭髮を大束ねと云ふに取り上げ、双眼は爛々として人を射る如く、是ぞ家中に聞ゆる岩見重左衛門の一子重太郎兼相でございます 殿『是ヨ、兼相近う進め』重太郎は殿に對つて默禮を致し 殿『遠慮には及ばん、近う』と再三のお言葉でございます故、重太郎は大勢の人に會釋をしながら、殿の御側近くへ進み寄り、兩手を挾て頭を低げました 殿『兼相其方には若年ながら、武勇絶倫の由、予は仄に聞き及んで居るが、今日は是非其方の腕前をば予は實見を致したいが何うぢや 重『コハ思ひもよらざるお言葉を頂き、何んとも手前赤面の至り

にござります、未だ修行中のこと故、上に御覽に供する程の業に是れなく　殿『イヤ〳〵兼相、左樣に辭退をせんでも宜い、誰かある兼相の相手を致す者はないか、望みの者は速に是へ出て重太郎の相手を致せ』此時坐中は寂々として水をうつたる如く、咳拂ひ一ッする者はございません、何れも頭を低げて居り、迂濶殿樣の顏を見て撰れた時は、却て大勢の前で恥を曝さなきやアならないと、皆さし伏向いて居りました、隆景公は　殿『是ヨ、誰も相手に出る者はないか、山崎金八、其方速に重太郎の相手を致せ　金『恐れながら手前は最前より腹痛に堪兼て居ります、平に御高免下さい　殿『櫻井、然らば其方が相手に出ろ　櫻『手前は劇しい頭痛でございまして　殿『中

田其方は何うぢや　中『手前は疝癪の氣味でございます　殿『今日は正月の七草と云ふ目出度日ではないか、大分病ひに冒されて居る者があるやうぢやな、石渡其方が速に出イ　石『手前は子宮病でございます　殿『何に子宮病ぢや、男子に子宮病があるか　石『左ればございます、女ならば子宮病だが、男だから疝氣でございます』誰か出る者がありさうなものだと、隆景公は餘りに家中の者が不甲斐ない爲に　殿『誰も出る者はないか　○『恐れながら　某が岩見の相手を致します　殿『オー大澤ぢやナ、然らば速に其方に重太郎の相手を申付る』重太郎は早々殿の御前を退き庭へと飛下りました、大澤鄕太夫は是も續いて庭へ飛下り、直樣道具を取寄せまして、重太郎は襷十

字に綾なして、手拭疊んで汗止の鉢巻を爲し、長さ二尺三寸の肥前の大村の赤樫を蛤刃に刻上げたる木劍を把り、大澤郷太夫も充分の支度に及びまして、サア來イ來れと身構へを致して、

フシ「此時太守左衞門尉隆景公は　御椽端近くにとお進みに相成り　其他一同の方々も此の勝負如何にと殿の後にズラリと居並びまして　手に汗を握り目はたきも致さず肩肱怒らして　勝負如何にと差控へたり　此時大澤郷太夫は　今日の大切なる殿の御前の立合なれば　敗を取りし其時は　奉公はモー是れ今

日是れ限りなりと　一世の勇をば現はして　重太郎兼相の隙ありし其時は　只一打に打据ゑやうと身構へたり」

双方充分に構へて居りましたが、重太郎兼相は若年ながら前後を能く考へて居りますから大事に大事を取り、大敵と見て驚くな、小敵と見て侮るな、例へば己れの身には郷太夫は弱敵と思つて居りますが、若し侮りて己れが敗を取りし時は、家中の物笑ひの種なりと、稍暫く睨み合つて居りましたが、如何なる隙があつたりけん、郷太夫がヤッと喚いて打込で來るのを、空を打して置き、手元へ飛び込んと爲したる時、左はさせじと早くも郷太夫は後へ飛び退り、エイ

ヤツ、と頻りに打合て居りましたが、互ひに拔を爭ふ其有樣は

セメ「燕飛の折かけ　飛鳥の散亂　虛々實々　千變萬化の秘術を盡し　前にあるかと思へば後に現はれ後にあるかと思へば前へと現はれ　蝶の羽がへし群燕　獅子奮迅の勢ひを現はし　龍と躍り虎と翔る有樣は　目にも止らんばかりなり　折しも大喝一聲重太郎が鄕太夫を臨で打込だり」

流石の鄕太夫は身を開かうとしたが、交す暇もなく、頭上を劇しく打れたり、何かは堪らん眼暗んでヅデンと夫へ打倒れ、暫時の間起

上ることも出來ず、此時坐中の人々は思はず知らず、ドッと鬨の聲をあげたり、打倒れたる鄕太夫を重太郎は早くも是を抱起し、頻りに介抱を致しました、殿は是を御覽遊ばし　殿『是ヨ鄕太夫へ手當をとらせイ、重太郎近う』　兼相は襷鉢卷を取のけ、塵打拂つて殿の前へ進み　重『今に始めぬ其方の腕前、實以て感ずるに猶餘りあり、改めて盃を取らせる』七五三の盃を重太郎へ遣はす、七五三と云ふと隨分入るもので、長柄の銚子を取り小姓は直に浪々と酌込む、重太郎は是を一と息に飲ほしました　殿『兼相美事ぢや、今一盞取らせる』又々頂戴を致し、時刻が參りました故、早々殿にお暇を願ひ屋敷へと戻りました、是が家中の大評判となりました、一方の大澤

郷太夫は重太郎の爲に萬坐の中で敗を取り、病氣と號して當分の間は登城を致しませんでした、時しも三月の中旬、今日は重太郎兼相供をも連れずに一人で櫻ケ岡へ櫻を見物に參りました、所々の櫻を詠めて居ります内に、彼是時刻も七ッ頃ほひ、櫻ケ岡を出て是から武者小路の屋敷へ戻らうとしまして、フト左りを見れば梅屋と云ふ料理屋がございます　重『免せよ　女『オヤ入らッしやいまし』重太郎は女中の案内で奥の一間へ通り、酒肴を取り寄せて、獨酌でチビリ〳〵飲で居りますと、ガラ〳〵只ならぬ物音に何事が出來したかと、耳を引立て聞て居りますと　侍『サア勘辨相成らん、何故斯樣な惡い酒を是へ出した、毒の入つて居る酒を吾々へ飲して殺さうと

云ふ考へだが、何んの遺恨があつて斯樣な惡酒を出したか、手に取る樣に聞える　重『是ヨ』と頻りに手を叩いた　女『お客樣、此方でございますか　重『何んだ大分騷がいしが　女『實は旦那樣、貴下の前で斯樣なこゝを申して恐れ入りますが、御城内の旦那樣が御酩酊を爲すつて、自分で煙草の吹殼を盃の中に落したのを、手前共で銚子の中へ入れて來たんだと云ふので、サン〳〵無理難題を申しますので、手のつけ樣もございません　重『何に城内の、一人か　女『イヽエ五人でございます　重『左樣か、然らば拙者が何んとか納めてやらう』と重太郎は兩刀を持てゆけば、事穏便になるまいと思ひました故、丸腰で女中の案内に連れられて　女『アノ旦那樣此のお座敷で』

フト重太郎が中を覗くと、是は惡い處へ來たワイと思ひました、夫は其筈でございます、正月七草の當日に己れの爲に打負て以來、病氣と號して役向へ出ません大澤鄉太夫でございます、今更引くに退れん場合、鄉太夫は入口へ立た男を見れば重太郎兼相 鄉『オー夫へ參つたのは岩見か 重『イヤ是は大澤氏、妙ナ處でお目にかゝるもので、就きまして貴殿に折入てお願ひ申したいことありて罷越したが

鄉『何に拙者に賴みたい、何んだ 重『大澤氏、當家の女中の疎忽より事起り、貴殿のお怒りを招く樣になり、何んとも恐縮ではございるが、此處は手前にお任せを願ひたい 鄉『餘計なことを云ふナ、女中になり代り詫をする、貴公も立派な武士ではないか、茶屋小屋の

女中になり代つて詫をするから勘辨をしろとは、更に拙者には其意が判らん 重『イヤ何うか此場は手前にお任せを願ひたい、當家の者も如何とも相濟んと頻りに云ひ譯をして居る位 鄉『任すことはならん、グズ〳〵云ふナ、其處退け 重『然らば是程までお願ひ申しても お肯入れなくば已むを得ませんが、然しお身も知らん人ならば、其儘にても差支はないが、同家中の者とあつて見れば、此儘手前も默つて歸る譯には參りません、知人のこと故、一ッには貴殿のお爲めを思ひ、お扱ひ致せし次第でござるが、何うあつても御承知は爲さらんか 鄉『默れ要なき扱ひ立、云ふナ』と大澤鄉太夫は、傍への大皿を取るより早く、兼相を臨んで、パッと投付けたり、躰を轉にた

兼相　重『何を致す不禮な奴』と後へ退る、折しも跡に控へて居た四人の若侍は　侍『夫れ岩見をやつてしまへ』と打つて來たのを、右と左りに投げ倒し、此の勢ひに恐れて、再びかゝる勇氣もなく、ホウ〳〵の体で五人の者は逃目散に此處を逃げ去りました、梅屋の主人を始め、一同の者が入れ代り立代り、重太郎に厚く禮を述べました、改めて酒肴を進物として、重太郎の處へ持て參りましたが、重太郎は馳走を受けやうと云ふので、爲た譯ではございませんから、代金を拂つて彼是五ッ時分になつて梅屋を立出でました　重『アー快い心持だわへ』と酒が充分にまはつたものと見えまして、

フシ『花咲ば　告げんと云ひし山里の　使は來り馬に

鞍　鞍馬の山の薄櫻　と鞍馬天狗を謠ひ　亂れたる一調子を高くはり上げ　春とは云へど　吹き來る風は肌寒く　ヒヨロリ〳〵とよろめきながら　手拍子拍て兼相が」

セメ「さしかゝつて來た處は　名代の柳の堤なり　折りしもヤッと云ふ聲諸共に　岩見兼相の頭にパッと閃くと見えたりしが　心得たりと兼相は　曲者と云ふ聲諸共に　備前の國の住人　長舟長光の大刀ギラ

りと引拔きたり」

ナリリッとつけながら見ると、畫なほ暗き柳の堤、殊に夜分のことなれば更に見分はつきません、兼相觀念しろと切込で來たのを、チャリンと合し、エイと一と足踏込で、切付けたので何かは堪らん、肩先眞深に割付けられ、右から來るのを後へ躰を引て、空を切らして突の一本、是又其處へ打倒れ、左りから來るのを横へ拂つた一文字、正面から來る奴を引外づして拜み打、己れと後より切付けたのを躰を轉じて兼相は、逆袈裟にと切付けたり、人數は益々增すばかり、右往左往、四方八面に暴れ廻り、彼是十八九人を切倒す、此勢ひに恐れを爲したものと見えまして、早くも何處ともなく逃出しま

した、重太郎はホッと一息吐き、如何なる奴であるか更に手にかけて殺した者は判りません、其儘父重左衞門の許へ歸り『實は今曉是々の譯で多くの者に突然に取卷れ、先方から仕掛たにもせよ、多くの者を切て見れば、此儘無事に治りますまい、夜が明ければ早々手前をお目附迄お引渡しを願ひます』重左衞門も始めて聞て大いに驚きまして、何んぼ何んでも重太郎が一人で十八九人を切殺したと云ふのは、眞とは思はれません、兄の重藏は鬼に角柳の堤の樣子を見屆けて來やうと、來つて見ると血潮は四邊に こぼれて居りますが、死體は少しも見當りません故、重藏は直樣屋敷に戻りました、而て見ると何れも傷を受けた計りで、命にかゝはる程のことはある

まい、何をするにも明朝にならんければ判りません故、夜の明るのを待て、重左衛門と重藏の二人が夫となく、樣子を探つて見ますと重太郎へ切付けた者は大澤鄕太夫を始め其他二十二名と云ふことが判り、何れも内々にて誰にも是は洩しません、重左衛門は例へ傷にもしろ、若し此事が公になるなれば、重太郎も此儘には濟むまいと思ひ、ソコデ重太郎を呼で 左『偖其方も此度の間違ひは、未だお上のお耳にも這入ん樣子故、向ふ兩三年の間遠慮して諸國を修行致して參れ』と金子五十両を夫へ出す、重太郎も父の手許ばかりで修行して居ても、充分に修行は出來ないと思ひ、此度こそは幸ひ諸國を廻つて、腕を磨いて來やうと、兄の重藏、妹のお辻、伯父の薄田

七郎右衛門等に暇を告げまして、

フシ『旅の支度も充分に致し　住みなれました筑前相良の郡　名島の父の家をば跡になし　是れ親子兄弟今世の名殘になるとは　神ならぬ凡人の淺間しさ露知る由もなく　廻り廻つて三年目　乘り込で參りましたのは　下野國宇都宮の城下へとかゝりたり』

町の中央へ參りますと、劇しい木劍の音が聞えます、見ると一刀流劍術指南所高村彌平次と書てある　重『お願ひ申す　○『何れから　重『拙者は筑前名島浪人岩見兼相と申する者、先生に一本の御教導を受

け度罷り越しました、宜しくお執成を願ひます』取次は奥へ參り、程なく夫へ出て來て、洗足を出し足を洗ひ、重太郎は道場へ通りました、高村彌平次と試合を致しましたが、彌平次は遂に敗を取り、又なきものと彌平次は、重太郎を一室へ通し、酒肴を出して充分に馳走を爲して、悠然と御滯在を願ひたいと申しました故、重太郎も急ぐ旅ではございませんから、此家に滯在をしました處、高村彌平次は宇都宮在に其頃遊女屋がございまして、三浦屋の若龍と云ふ女に妻のある身を顧みず、せツせと通ひつめて居りましたが、

フシ「浮草や今日は向ふの岸に咲く　彌平次は源平藤
橘四姓に枕を交す遊女にうつゝをぬかし　雨の降る

夜も風の夜も厭はず　通ひつめて居りましたが　お話變つて筑前相良の郡名島の城主　小早川左衞門尉隆景殿の臣岩見重左衞門　敢なく非業の最期を遂し其が爲めに　重太郎兼相が國表へと立戻る　其譯は父の重左衞門が　廣瀬軍藏の爲に敢果なき終を遂げまする事柄は」

筑前名島の小早川隆景は老年に至り、奥方との間に未だ世嗣ざがございません故、木下秀家の二男侍從秀秋を養子に致しました、然るに御養子秀秋殿のお供をして參りました人は、東軍流の劒法の達人

で廣瀬軍藏と云ふ、秀秋公は殊の外此の軍藏を御愛しになり、養家先までお連れになりました、スルト小早川公へ永らくの間御手を執て指南をして居りました野村金右衞門と云ふ槍劍二道の達人でございましたが、惜しいことに野村先生はお亡りになり早速野村の跡役を定めんければなりませんので、井上五郎太夫と云ふ重役が太守へ申上げまして、岩見重左衞門と廣瀬軍藏と御前試合をさせ、勝をとつた者をば御指南番に致した方が宜うございます」と言上を致し、御養子秀秋公は廣瀬軍藏をお招ぎになり此趣をお傳へになりました、軍藏内心大いに喜びました、一方は岩見を招ぎ此趣を告げると、重左衞門は恐れながら申上げます、手前は最早老る年でございますから、廣瀬軍藏を以て野村の跡役仰付けを願ひます、御前試合は平に御免しを願ひます、秀秋公は御自分が御連れになつた廣瀬軍藏と岩見と是非試合を爲せやうと云ふ思召でございますから、再三重左衞門に申付け、岩見は迷惑とは心得たが、君命なれば已むを得ず御受に及びました、

フシ【身にふりかゝる災ひが來るとも知らず　御前試合の當日をば待受けて居りましたが　時しも慶長二年四月の十五日となりました　今日は廣瀬岩見の晴の勝負と家中の重立たる方々は　名島の城内櫻の御

馬場へ集りました　正面の處には棧敷を搆へ　紫縮緬の定紋附たる幔幕を張り廻し　御養子中納言秀秋公御控へになり　試合の時刻は正四ッとこそは定つたり」

岩見重左衞門、廣瀨軍藏の兩人殿へ對つて默禮を致しました、此時太守秀秋公は兩人をお側近くへお招ぎになり　秀『コリや兩人、今日の試合何れが勝ち、又は敗をとつても決して是を遺恨に思つては相成らん』兩人は御受を致し、早々支度に及び、ヤッと聲をかけて双方身構へ、岩見は戸田流の中段に構へ、軍藏の樣子如何にとヂッ

〳〵とつけながら見ると　重『成程、若殿御意に入りの軍藏、是は軍藏を打込んだ時は上の御不興を蒙るは知れた事、又當人も打負なば必ず深く我等を怨むであらう、我等は老先の知れた身躰故、先方に勝を讓つてやれば無事に濟むだらう』と思ひました故負でやらうと心を堅めた上は別に心配の事もございません、エイ、ヤッ、互ひに氣合を入れて居りましたが、廣瀨軍藏は岩見を臨んで大喝一聲打込んで來ましたのを、ポンポン二三度四五度あしらつて居りましたが軍藏の打込む木劍を岩見は故意と小手を出して軍藏に打せました、

重『參つた、恐れ入りました　軍『イヤ失禮を致した、岩見氏、貴公は御當家で聞ゆる劍道名譽の御方と云ふのは豫て聞き及ひましたが

聞くと見るとは大いな相違、御年若なれば寸暇の節は手前方へ御出あれと、申したいが、失禮ながら貴殿も老る年故、此の先修行は六ケ敷事でござる』と鼻高々として軍藏は多くの人を睨まはした、此の傲慢の態を見て、家中の人々苦笑ひをして居りました、秀秋公も岩見の腕前聞きしに劣る有樣で茫然として居りました、イヨ〳〵廣瀨軍藏を野村金右衞門の跡役に定め、三百五十石をお遣はしになりました、然るに廣瀨軍藏は岩見の事を塵芥の如くに罵つて居りました、誰が告げるともなく重左衞門の耳に入りましたが、決して氣にも止めずに居りましたが、總領の重藏は是を聞て大いに立腹致し、何かあつたれば廣瀨軍藏を取挫ひて呉れやう、と樣子を窺つて居り

フシ「頃しも八月十五日となりましたが　小早川家では例年の家例と云ふので　三重のお櫓に太守を始めとして　重立たる者三十餘名集りました　中にも廣瀨軍藏は上見ぬ鷲の振舞にて　殿の御前も憚らず高聲張りあげ笑ひ狂じて居りましたが　餘りと云へば人もなげなる振舞なりと　坐中の者はあッ氣にとられて居りました」

此處に軍藏は坐中を見廻し左りの席に岩見重左衞門が控へて居りま

す故、ツカ〳〵と岩見の傍へ寄り　軍『岩見氏、失禮ながらお尋ね申すが、我國で眞の軍學者は何人でござらう　重『左樣でございます、手前の考へでは先づ信玄を以て軍學者と心得ます　軍『何に武田信玄を以て軍學者とは近頃以て耳新らしき事を承はるものかな、如何なる處を以て貴公は左樣云はれる　重『左れば元龜三年十月兵を起し濱松城へ攻かゝる際、味方ケ原の備立を以て知るべし　軍『イヤ信玄抔が軍學者抔とは以ての外なり』と軍藏は威丈ケ高になり、双方聲の調子が段々高くなり、論は無益と軍藏は立上り　軍『貴殿と有無の勝負を致さう』と重左衞門も餘りと云へば軍藏の憎き振舞、一と懲め懲してくれん、と兩人高殿を降り、アワヤ劍戟を交へんと云ふ際

小早川家の重臣坂田庄太夫殿が中に入り、漸々其場は治りました、此時は軍藏の惡い事が殿のお目にとまりました、軍藏は早くも當所を退き、重左衞門は上のお相手を致し、四ッ半頃に上の御前をお暇を告げ、下馬先へ參りますと供の久助が待て居りまして　久『旦那樣大層遲くなりましたナ　重『久助、殿の御相手を致し永くなつた、定めし待遠であつたらう　久『イエ待遠ちやアございません、私共へも御酒とお肴を頂きました』ドレ出懸けやうと重左衞門は醉が十二分に廻り、よろめきながら恰度さしかゝつて參りましたのは、柳の御馬場

フシ「一天の樣子を見れば玲瓏たる月は　銀盤を研た

る如く　月見る月は多けれど　今宵見るのは眞の月
かと一人うなづき　是は唐土かね金山の麓にて候と
猩々の謠を唄ひながらお馬塲を越して　籔の繁茂を
左りに眺め」
セメ「折しも筒音高く一發の彈丸は　久助の耳元へ高
く聞えたり　何事ならんと久助は　見ればコハ如何
に主人の重左衞門殿は　血に染で其塲へ倒れたり」
久助は驚いて主人の側へ寄り　久『旦那樣〳〵』頻と聲を揚げ、重左衞
門は手足を顫はし、兩眼を見開き、もがいて居りました、お話は變

り、岩見重藏は父上の戻りが遲いと云ふので迎ひに往うと柳の馬塲
を指して來ると、ヅドンと云ふ鐵砲の音、合點ゆかずと四邊を見る
と、籔の中より三人の覆面頭巾で顏を包み、雲を霞と逃げ行く樣子
よもや父を害した三人とは知らず、來て見れば此のていたらく、久
助と共々に力を合せ屋敷へ父を擔ぎ込み醫者よ藥よと夜中ながらも
手當を盡しましたが遂に其甲斐もない、急所の深傷に此の世を去り
ました、早々此趣を上へお屆けに及び、何者の所爲であるかと隈
なく曲者をば詮議をしましたが判りません、スルト廣瀨軍藏、成瀨
軍太夫、大川八左衞門三人の姿が見へません、偖は廣瀨大川成瀨三
人の手にかゝつて死を遂げたのだらう、と三人の行衞を探したが更

に判らず、岩見重藏は太守へ仇討免狀を願ひ出ますと、早々御聞屆けになりました故、喜で重藏は免狀を頂き、弟重太郎の處へ此事を知らせ樣と思ひましたが、野州宇都宮の高村彌平次方に居るとは氣が付ず、母のおみよを薄田七郎右衞門の許へ預けまして、妹のお辻を連れて、

フシ「俱不戴天の仇敵　大川成瀨廣瀨の三人の行衞を探し　父の無念を晴さんと　筑前名島を發足爲しまして　廻り廻つて乘り込で參りました　處も名代の野州の小山で仇敵の三人に出合ひ　岩見重藏は敢なく返り討にとなりまして　妹お辻は三浦屋方へと身賣を爲し　名も若龍と改めて　勤め奉公して居りましたが　圖らず兄の重太郎に出會まする一條は此の後の御緣に伺ひます」

岩見重太郎

終

澁川伴五郎

浪花節倶樂部口演

フシ「澁川や　たえぬ流の其音は　傳へて耳に菊がさね　眼には初めて三つ紋の　花はちりても香は殘る　香りは袖に隠れなき　その一節を今茲に」

品川の仁右衛門横町に居りまして澁川伴五郎といふ柔術家がございます、此の人は前名を重助と云つて、初め下谷の山伏町と云ふ處に町道場を開いて居りましたが左のみお弟子もございません、處が二

三軒先にチョッとした小料理屋がございます、武士が三人で酒を飲んで居りましたが、懐中に持合せでもなかつたものと見えて、些細な事を咎め立て、真剣の鞘を拂つて手當り次第に打毀しを始めまして、町内中は顚倒返るやうな騒ぎ、スルト二三人重助先生の家へ飛んで參りまして ○『先生、お願ひが有つて駈付けました直ぐどうかお出でなすつてお呉んなさい』 重『何んだ ○『外ぢやアございません が二三軒先の料理屋で、武士が三人長刀を振廻して、家中の者を追拂つちまつて、手當り次第の亂暴、御迷惑でも一ッ御出なすつて、亂暴者を取押へて戴きたいが、如何でございませう』 重『ア、さうかそれは〳〵飛んだ心得違ひの奴だ、承知をしました、今御同道しま

す ○『御迷惑でも直ぐどうか先生願ひます』といつた、處が重助先生中々チョックリ出掛けさうな氣色がないから ○『先生、お待ち申して居りますが、お早くどうか願ひたいもので』 重『ア、承知をいたしました、生憎今日人が來たので、まだ食事前でチョット御飯を頂いて行くから待つて居て下さい』と膳を出して悠々と飯を食初めたサア驚いたのは町内の若い者 ○『どうか先生、お早く願ひたいもので』 重『直きだからチョット待つて居てお呉れ』と悠々飯を食つて居るのが、手間の取れること大變 ○『どうだ飯を一粒〳〵拾つて喰んでる、那の鹽梅ぢやア一日掛つてしまふ、柔術の先生だつて砌術の先生だつて、平常は空威張に威張るやうなものゝ、扨實地に臨んで

見ると是れだ、對手が三人だらう、忌とは云へぬ者だからグヅ〳〵飯を食つて居る』と惡るく云つて居ります中に漸々飯を食ひ終つた

○『マア宜い鹽梅だ、ちやア先生直ぐ御同道を願ひます』重『承知した、チョッと待つて下さい、厠へ行つて來ます』と雪隱へ這入つた處が長いの長くないの ○『是だ、飯を食つて仕舞つて、今度は雪隱へ籠城して仕舞つて、是れはチョツクリ出て來られまい』と惡く云ふまいこッちやアない、頻りに彼是いつて居りまする內に厠から出て來て 重『イヤ大きにお待たせ申した、これから御同道しませう

○『ちやアどうか一ッ御迷惑でも御願ひ申します』と先へ立つて出ます町內の若い者が、大概モウ亂暴者は行つて仕舞つた時分だらう

と、來て見ると三人の武士が大胡座を掻いてどうせ錢は拂はないといふ考へ、頻りに酒を飲み、物を喰つて居る、座敷には皿小鉢が微塵になつて諸方に散つて居ります、重助此体を見て、揉手をしながら這入つて來た 重『御免下さいまし、手前は此町內に居る重助と申す者で、何か承はれば當家の召仕が疎忽をして、各々樣のお怒りに觸れましたさうで、お腹立は恐れ入つたがどうか御勘辨を下さるやう、各々方が斯樣いたしてお在で遊ばすと、町內一同の者大きに迷惑をいたします』と刀も脇差も何にも差して居りませんから、町人と思ひましたものと見えて、三人の武士大眼を見開いて 侍『默れ身の程知らん奴だ、素町人の分際として武士に向つて何んだ、トッ

トと歸れ　重『イヱ左樣仰つしやつては甚だ迷惑いたします、是非どうかお引取りを　侍『是非、是非とは不屈なことを申す奴だ武士に向つて是非とは何んだ　侍『オイ〳〵面倒だ、切ッちまはつしやい　侍『合點だ』と突然一人が大刀を閃めかして重助望んで切つて掛つた、眞二ッと思ひきや、ヒラリ体を躱した重助が、

フシ「利腕取つて引擔き　筋斗打たして投付ける　續いて掛る一人を　手刀打つて眞の一ト當　殘る一人逃んとするを　襟髮摑んで引捕へ　脾腹をエイと突きたれば　ウーンとばかりにノケ反つたり」

重助先生は三人を夫れへ當て殺して了ひましたが、門口を見よすると、町内の者が大勢ワーワッと云つて居りますから　重『お町役衆、縄をお持ち下さい』之れを聞いてドカ〳〵ドカ〳〵這入つて來て

△『どうも有難う存じます、何うかお賴み申します』と縄を持つて來る、三人の武士へ活を入れ、氣の附いた處を、三人共に高手小手に括し上げまして、番屋へ三人を上げて仕舞ひ、塵打拂つて重助は立歸りました、サア一同の者之れを見て感心をして成程どうも柔術といふものは大したものだ、何うも重助といふ人は思ひの外の柔術の名人だ、那れ程ぢやアなからうと思つたが、大層なものぢやアねへか、ワーワッと云つて賞める、中に最初迎ひに來た連中が、重助

先生の所へ打揃つて禮に參りまして ○『どうも先生お蔭樣で有難う存じます、それに就いて先生、私共がお願ひ申しに來た時に、飯を食べてお出でなすつたのが、長かつたの何んのッてどうも手間が取れて、漸う飯を食ひ終つたかと思ふと、今度は雪隱へ飛込んで長へ小便場でしたな、何んだつて那んなに手間を取つた者でございます』 ○『イヤ夫れはお前方が素人考へと云ふのだ宜く考へて見ろ、先方が未熟だから私は忽ち取つて押へたが、決して人は侮るものではない、先方が私より腕前が上手であつたら何う云ふものだ、先づ怪我をいたさんければならんと、最初考へなければならん腹が充分に滿ちて居り、或は大便小便の用を足して後に打合へば、少し位打

たれても斬られても直きそれが癒る、腹が空つた時や兩便の氣のある時に、打たれたり斬られたりしますと、中々跡の療治が捗々しく屆かん、勝つことばかり知つて負ける事を知らんければ上手名人とは言はん ○『へエ、成程、さうでございますかな、腹の空つた時や小便に行きてエ、雪隱に行きてエといふ時に怪我をすると、チョツクリ療治は屆かねへ、さうでございますか』と云つて大層町人は感心をした、其當座は山伏町、山崎町、車坂邊に喧嘩といふものが絶えて無くなつた、何故かといふと若い者が往來で突當り ○『ヤイ此ん畜生、氣を付けて行け ○『何んだ ○『人の足を踏んで何んだつて默つて行きやアがる ○『ナニ篦棒めエ乃公が踏んだんぢやアねへ、

手前の足が乃公の足の下へ潜り込んだんだ　○『何を巫山戯た事を吐かしやァが』ると忽ち喧嘩にならうとする　○『待て〳〵、腹が空つて堪らねへ、家へ行つて飯を一杯食つて來るから待つて居ろ　△『宜し、其内に乃公は雪隱へ行つて來るから、早く食つて來や　○『合點だ』一人は家に歸つて飯を食ふ一人は雪隱へ這入り、扨て宜く〳〵考がへると是は喧嘩をして友達に厄介になつたつて詰らねへ、マア〳〵止した方が宜からうと考へる、一人は飯を食つて氣が重くなつて、是れは喧嘩を爲る氣がなくなつて仕舞ふ、旨い事を重助先生教へて仕舞つた、パッタリ喧嘩といふものが無くなつたが、併し是れが大層評判になり、大分道場も繁昌いたし、其後品川仁右衞門横町

に引移つて澁川伴五郎といつて中興澁川流の元祖と云つたのは此の重助でございます、能いお弟子も澤山ございました、道場も盛大でございましたが澁川先生が信州へ參らなければならぬと云ふは、御門人の中に信州權堂に居りまする今井泰三といふものが此度目錄を免して呉れと申して參つたから善光寺參詣がてら權堂へ參つて彼れに目錄を傳達いたして遣はさんと云ふので、道場は門弟に托して、江戸表を出立致しました、

フシ「鳥の啼く東の空を跡にして　わらび浦和や大宮と　後に其名も上尾宿　桶川過ぎて鴻の巣の　早や吹上に來て見れば　熊谷寺の鐘の音　次第に深谷本

庄の　道倉賀野の驛路さへ　唯一筋に高崎へ　指して赴く板鼻や　世の浮川も打渡り　客呼ぶ聲の安中を　越せばつゞける八本木　時を松井田坂本に　懸れば登る名も高き　碓氷峠の山路をも　下れば足も輕井澤　急ぐ沓掛追分と　左にそれて行く先は　小諸田中に上田道　坂城戸倉よ屋代里　篠井過ぎて丹波島　日數もこゝに長野なる　善光寺へと着きにけり」

是より權堂へ參り今井泰三に極意を授け數日滯留中善光寺へ參詣デ

いたしました所、計らず懇意になりましたのは武州熊谷在の正木村正木善右衞門と云ふ者でございまして、何うせ歸り途の事で有ッて　ら是非御立寄下さいと言はれて、伴五郎先生も進めに隨ひ同行いたしました、程無く立歸りました熊谷在正木村の善右衞門の宅へ來ると　一町四方もあらうかといふ住居まはりは堀になつて刎橋がかゝり　杉の立木で家の周圍を取り卷き高塀が出來て冠木門がある立派な家でございます、若夫婦始め奉公人の十四五人も居りまする、正木夫婦は澁川先生を取持ち彼是七八日遊んで居りましたが、番頭などは馴染になりまして、二番々頭の新兵衞が　新『時に先生、毎日貴方さぞ御退屈でございませう　伴『イヤ新兵衞察して呉れ、本ばかり讀ん

で居るが退屈をしたよ　新『御尤ともでございます處で先生今夜は熊谷へ押しくらを見に參りますがお出でになりませんか　伴『押しくらか　新『左樣でございます押しくらで中々江戸の者も叶はない腕達者なものがございます　伴『それは面白からう、實は江戸で毎度押しくらを爲るが、俺は押しくらは大好物だ　新『ヘエ、中々先生は御通人でございますね、オイ三郎兵衛さん先生は押しくらはお好物だとよ

三『ソイッは中々面白い、夫では先生押しくらの所へ參りませう、酒は向ふで呑みますから御膳はコヽで食べない方が宜うございます

伴『ウム酒を押しくらで呑ませるのか　新『酒の氣がなくつては押しくら見には參れません　伴『處によつていろ〳〵かはるものだ、江戸

表なぞは押しくら見物に行く人は、あまり酒なぞは呑まない　新『妙でございますね、マア何にしろ先生出懸けませう』と新兵衛三郎兵衛の二人は澁川先生を引出して、遠くもない熊谷へ連れて來た、日はモーとうにくれて彼是五ツともなる頃　伴『コレ〳〵新兵衛押しくらは何處にあるのだ　新『先生向ふに見える行燈の掛つてゐる家がございませう、アレが押しくらの宿でございます　伴『花野屋としてあるが、アレが押しくらの宿か　新『そうでございます、隨分面白い押しくらがございます』と話しながら來ると、バラ〳〵と花野屋から飛出した、十六七から二十二三になるかと思ふ女で、面にばかりベタ〳〵おしろいをつけて、夫も自体色が黑い所へおしろいをつけた

から、黒板塀に白のペンキを塗つたやうだ、赤黒い毛を島田に取りあげて、形はといふと大形のしぼり湯衣に黒ぬりの駒下駄白足袋をはいて居る、伴五郎は妙な女が出て來たと思つて居ると新兵衛が

新『先生是れが押しくらでございます　伴『何にかコンナ女共が角力を取るのか　新『左様で　伴『だまれ押しくら〳〵といふから、角力の興行があるかと心得見物に參つた處、淫賣婦を相手にさせるとはなんだ　新『アハ、、、コレハ先生大間違でございます、此の邊では飯盛女の事を押しくらと申します、上州路へはいると笊そばといひ、信州へ行くと赤牛と云ひます、貴方も好物だといふから人は見掛けに寄らぬものだと思つてコレへ引つぱつて來ましたが、先生は押し

くらを角力だと思つたのですか　伴『如何にも俺は角力だと思つた、淫賣婦などを買つて遊ぶなど、怪しからん奴だ、瘡毒と云ふ惡い病でも請けたら先祖や親へたいし申し譯はない　新『そんな堅い事を言はないで一晩お遊びなさい何も交際です　伴『コンナ交際は武士たるべきものゝすべきでないサア〳〵歸れ〳〵』といふと押しくらの女どもが　女『旦那ソンナ事をいはないで今晩遊んでいらつしやいヨ、鳥渡旦那　伴『そばへ寄るナ放れて居ろ不屆奴め、側へくると當身をくはせるぞ　女『アラ鳥渡怖い顏をする事、イヤならイヤでよふございますサア新兵衛さん三郎兵衛さんお出でなさい』と赤く黒く恐ろしい太い手を出して二人の首へかけると引きずつていつてしまつた

伴五郎が　伴『世の中には馬鹿な奴があるものだ、アンナ女を相手に酒を飲んで愉快が出來るものか、斯うと知つたら來るではなかつた馬鹿ノ〳〵しいドレ歸らう』と正木善右衞門の處をさして歸つた時は五月の廿五日で月はあるとしても明方でなければ顏も見えない夜の四ッ半とも思ふ頃、

フシ「朝の嵐夕の雨　今日また明日の昔ぞと　夕の露の村時雨　定めなき世に古川の　水の泡沫我いかに人を仇にや思ふらん」

と放下僧の謠曲をうたひながら、空濠の所へ來て二間ばかり飛ぼうとすると、足へカラ〳〵とさはつたものがある、何んだと思つてす

かし見ると繩梯子だ、ハテナと思つて正木の家を見ると、チラ〳〵あかりがアチッコッチに見えて居る　伴『偖ては盜賊が這入つたか之は面白い、久し振りに澁川流の極意をためされるから』とニッコリ笑つた伴五郎、繩梯子のかゝつてあるを幸ひ夫れを足代にして、冠木門より内へスル〳〵と這入つて、松の木の間を人目をさけてゆくと、西の方角にあたつて木戸が出來て居てソコへ千両箱を二ッ三ッ置いてがんどう提灯であたりをてらして居るものは小賊と見なる、伴五郎あたりを見ると、誰も居ないからシラやつたりと夫れへ出たスルト其奴が　○『ヤイ、汝は誰れだ』と言葉の切れない中にエイといふと一ト當ハッとあてた、腹をあてられてウーンと倒れたを押さ

へてがんどうのあかりを消し、眞闇な處であたりを見て居た、スルト向ふからヨッショイ〳〵と千両箱を擔いで來た小賊が、夜目に伴五郎をすかして見て ○『そこに居るのは牛か 伴『オイ牛だヨ ○『ホイ來た』と出した千両箱をドッコイショと受取つた、伴五郎がかたへに置いて牛かとよんだ小賊が、其儘行かんとする處を左の手を延ばした伴五郎が、首筋を押さへてグイと引きよせる ○『ヤイ牛、冗談をするナ』といふ言葉の切れない内に、胸板をハッと一ト當てウーンと死んで了ふ、ドッコイショと先に殺した奴の上へのせて待つてゐると ○『ヨイショ〳〵、何うも古金だと見えて馬鹿に重い、オイ持つて來たヨ 伴『オイ來た ○『夫れ』と出したを受取つて伴五郎

がかたへに置きながら、足を飛ばしていんのうを蹴上げた急所、ウーンといふとズル〳〵と引きずつて又重ねて、跡のくるのを待つて居る ○『ヨイショ〳〵持つて來たヨ 伴『ヤア大きに大儀 ○『何んだ大儀だと大層な事をいやアがる、暗くつて分らねへが汝はだれだ』と聞かれて伴五郎ハッと思つたが 伴『拙者は牛だ ○『俺が牛だ……

…… 伴『偖は汝か牛か 牛『ヤイ怪しい奴が居た』といふ處を踏込んだ伴五郎、腰の刀へ手をかけるとバッサリ頭上から眞二ッに切つて落した ○『それ侍が居るぞ油斷をするナ』といふと各々腰の物を携へてヒラリ〳〵と庭へ飛下り、四方より差出したる合洞の光りで白晝のやうである ○『ヤイ侍だ、やつて了へ』と取卷く中にも、

セメ「豐島源次左衞門の　身中に於て去る者ありといはれたる　馬場の鬼藤太之れにあり　我腕前を見せ吳れんと　八角なる樫の棒　輕々と打振つて　眞向てらして打込むを　心得たりと伴五郎　飛違ひ樣空をうたし　横に拂つた一刀に　バッタリ夫れへ倒れたり　續いて來たるは賊の小頭　山猿權次と名乘りつゝ　槍リウ〳〵と引きしごき　突掛け來たるを澁川は　物々しやと渡り合ひ　忽ち槍を拂ひ上げ　手

許へ飛込む眞の早業　胸元さゝれて死してけり　直も取卷く數十人　火水になれともみたてる　向ふは眞向逃げるは脊筋　或は太股二の腕や　胴肩腰と嫌ひなく　切つて捨てしは手練の手の內　目覺ましかりける次第なり」

劍術は眞影流、柔術は元より澁川流二道に秀でし伴五郎秀方、まばたく隙に十四五人前後左右に切倒し、又は當身に打殺し死骸は山なすばかりであります　○「エイヾけ〳〵たかの知れたる浪人武藝者、俺が片附けてやるから手出しをするナ」と大勢を制してあらはれた

は、年頃四十二三にもなるか熊の皮の胴服を身につけ、奴袴を穿ちて白綾をたゝんで鉢巻をなし、武者草鞋をはいて銀の蛭巻なしたる刄渡り三尺もあらうといふ長刀を引つさげて ○『ヤイ、痩浪人俺は秩父山に住居をなして天下の奉行はさておき、將軍の掟にさへも從がはぬ、毛利の浪人豐島源次左衞門といふものだ、今宵當家へ推參なしたるは年來貯へ置く金銀米穀を奪つて、貧民どもへ施行をなさん爲め、然るに汝若年の身をも顧りみず、我が配下の奴を當殺し又は斬つて捨る段憎みても餘りあり、斬つてすてべき奴なれども、年にも似合ず聊か武藝の心得あるに依つて、今日より心を改め我が配下になれば、王公諸侯も及ばざる心のまゝの活計歡樂、但し不

承知とあれば此の薙刀が晃めくが最期の印しだ、イザ心を定めて返答しろ 伴『だまれ兇賊、天下の御法を打破り數名を從がへ深夜にじて門戸を破り押入る段、憎さもにくし善道へひるがへればよし左もなきときは、此の一刀が晃め〻が最期の印しだ、心を定めて繩目を受けるか但しは不承知か、サア源次左衞門返答しろ 源『ほざいたり浪人武藝者、斯くなる以上は論は無益だ、大坂陣できたへたる源次左衞門の手の内を見よや』と言ひながら水車の如く打振る薙刀流石は賊ながらも數年兵馬の間に奔走なしたる源次左衞門、おめき叫んで打振ります、

フシ「籠手薙手開らく手十文字　卍巴稻妻の秘術を盡

し　打つて掛れば此方もさるもの　身を躱したる伴五郎　水月射合と秘曲をつくし　彼方へかはし此方へさけ　稍しばし必死になつて戰つたり　互におとらぬ互角の腕前　いつ果つべきとも見えざりけり」

然るに伴五郎一喝して飛込んだが、飛鳥の如く源次左衞門心得たりと、薙刀の柄で拂ひ上げんとなしたる處を、伴五郎が切下した一刀のために、薙刀の眞只中を切られて、切先あまつて肩口へ切込まれた、之れはと源次左衞門が小刀の柄へ手を懸けるを、拜み打に來た一刀腦上を割られて、アッと血烟立つて倒れたり、其のトタン何處

から飛んで來たか、一發の彈丸が伴五郎の內股をかすつてそれまた、パット思つた澁川が向ふを見ると、プントいふ火繩の香り、藏の網戸に身を寄せて、一人の小賊が火繩銃を以つて今や射たんの有樣、おのれと大聲をかけると共に切り込んだ、伴五郎の刀の爲めに鐵砲ごと切られた、川中島のたゝかひに上杉謙信が、長光の太刀を振るつて信玄の旗本へ切込んだ時、大久保內膳が百目筒を持つて射たんとしたを、鐵砲ぐるみ切つたといふが、夫れは弘治の昔、之れは寬永の澁川奇代な名人だ、賊共は頭を打たれて靑くなり、夫れ引上げろと云ひながら逃んとするを、伴五郎が躍りかゝつて刀のむねで十二三人を打たをした、だれも向ふものがございませんから、正

木夫婦且は若主人を助けんと奥の間さして參りまして、主人夫婦や又番頭手代等のしばられて居るのを解いてやり、是から庭へ取つて返して見ると、十七八人の小賊共はウン〳〵うなつて居る、直ちに縄を持つて來て高手小手にいましめまして、金を土藏へ納め夜明けを以つて此の事を代官伊奈半左衞門へ訴へたるに、早速當家へ代官手附の御役人出役をして死人の檢視をいたし、生捕りは夫れ〴〵江戸表へさしおくる、尤とも此の伊奈半左衞門といふ人は伴五郎とは懇意であつた 伊『偖て先生此度の御手際は恐れ入りました、秩父山に大勢の兇賊が籠つて近在を荒すといふは聞及んで居ました故、既に先日大勢の組子を連れて召捕の爲に出張いたしたる處、却つて

我々共賊の爲に追散され、江戸表の聞こえも如何と實は心痛いたし居つたる處、先生の御盡力で御退治下される段誠に千萬忝じけない早々此の事を江戸表へ申し達し恩賞の御沙汰もござらう』と是から早速に江戸表へ申し達しますると、伴五郎先生へ御賞美がございました、是か爲に一層名前は高くなり、品川仁右衞門横町の道場は益〳〵盛んとなりました、此の澁川伴五郎の家は代々伴五郎と申します、

フシ「今も世に　語り傳へし澁川が　功績は香る菊の花　匂ひは史上に止めつゝ　幾千代までも武士道の名譽を後世に殘すらむ」

澁川伴五郎 終

大正二年三月二十二日印刷
大正二年四月二十五日發行

日本武術の響奥附

口演者　浪花節倶樂部

發行者　東京市淺草區旅籠町二丁目七番地　中村惣次郎

印刷者　東京市淺草區左衛門町一番地　岩見米三郎

發行所　日吉堂書店
電話下谷四九三一番
振替東京一一六一番

不許複製

270
885

終